

吉井源太と明治

《25》

東京の販路開拓

村上 弥生

「土佐紙業の恩人」没後100年

紙を仲立ちとした、吉井源太と人との交流について、見ていきたい。明治三十六（一九〇三）年に書かれた履歴書で、明治時代最初の項目は、同七（一八七四）年に流通の問題を解決するために働いたことだった。当時、高知県産の紙の評判が大きく落ち、紙業者の困難は、はなはだしいものになっていった。このため源太は、これをどうにかしたいという、同じ思いでいた旧土佐藩士の小八木卓助とともに大阪へ行き、原因を調査した。すると問題の原因は大阪の間屋にあることがわかった。

昔から土佐産の松魚（鯉）節、材木、紙の三品は、藩庁の許可を得て大坂間屋の手に委託され、専売されてきた。廃藩となったために監督も廃止され、間屋はこの機に乗じてほしいままに商売を行うようになった。またこの時、高知の紙の製造者も粗製濫造を極めたために困難な状態になったということがわかった。このため源太は、大阪の間屋に正当な取引をするよう説いてまわったが、応じてもらえなかった。また、高知へ帰って同業者に紙の改良や、東京へ新しい販路を作ることが必要であることを説いてみたが、やはり聞き入れられなかった。

源太は意を決して資産をつぎ込み、薄葉大判紙（後のコッピー紙）や改良した半切紙、雁皮紙などを東京へ出し、販路の開拓をしようとした。しかしこの当時、これらの紙は用途が非常に少なく、大失敗に終わった。

たのは楮製の半紙や美濃紙だった。このような中、源太は雁皮製の紙を市場へ出そうと試みたことがわかる。しかし少し先を行き過ぎたようだ。楮製の紙を使い慣れていた人々にこのような紙はあまりなじみが無かっただろう。そして、ま

きたようだ。楮製の紙を使いが、海外でもてはやされる時代にもなっていないかった。現在、大阪市内中之島の南側を土佐堀川が流れている。この南岸に江戸時代は土佐商人が集まっていた、土佐座と呼ばれた場所があった。また、これより南に今ではなくなって長堀通となっているが、長堀川という運河があった。これを使って、この岸にあった藩の蔵屋敷（米や特産物を保管する倉庫兼邸宅）に大阪湾から鯉節などが運び込まれた。

今でもここには鯉座橋という地名が残っている。すぐ東には白髪橋という地名もあり、かつて本山町の木材を運びこんだことから、同町の白髪山にちなんでつけられたという。ここは、大阪の木材市場発祥の地となり、現在は碑が立っている。蔵屋敷内に古くから鎮座していた稻荷は、第六代藩主が鎮守社とし、一般の参拝も許した。今は「土佐稻荷神社」となっていて、花見の名所だ。土佐と大坂とのつながりをしのぶことができる。

しかし、明治時代になつてからは、このような大阪とのつながりが新しい時代への対応を妨げたということだろう。紙の流通について、源太らの改善の努力が受け入れられない状況になっていた。高知県の紙商はこれ以後、東京へ販売するようになる。履歴書の書かれたころにはこれが隆盛を極めており、源太は、念願がかなって、心を慰めることができたと言っている。

（京大大学院研修員、京都府在住）



現在の大阪白髪橋。大阪木材市場発祥の地